仏教葬送事物の発展比較考　その五

和田謙寿

一

前編（駒大仏教学部紀要四十一号）に引続き、ここでは出棺・葬列・埋葬・法要等につき考察することにするが、その前に、台湾をはじめとした東南アジアの葬送習俗のひとこまを紹介することにする。日本の葬送習俗に似通う例のような場合も見られるが、また、趣を異にするものも多々あって、如何にも珍らしく感じられる。以下は東南アジアに留学中の観察調査事項である。

① 葬送の際タイでは、死者の家族の衣服は黒色が通例であり、バンコク等の都会部では上が白く、下は黒い衣服を着用する場合もある。マレイシア（クァラルンプール）の場合には、葬送の参列者は、どんな服装でも良いとされている。男性は回教帽をかぶり、肘と膝のかくれる服装（色は無関係）女性弔問者は頭髪を覆うベール、肘と膝のかくれる服装（色は前者同様に無関係）近年は多く白色の布を着用する傾向にある。

② 台湾では息子が親に先立って死んだ場合、その出棺の折、父親か母親が杖でその棺を叩く風習がある。現在ではあくまでも形式化されているが、「あなたは私より何故早く死んだのだ。この上も無い不幸な子どもである」と言いながら行うのである。

③ 台北の近郊・中国の南部につい最近まで残っていた習俗であるが、死亡すると直ちにお茶碗か、湯呑茶碗を割り、それから泣くと言う習慣がある。日本でもかつて、このような習慣が報告されていたが、日本の場合は、死者が二度とこの世に幽霊となって現われぬためのものと思われていたが、当地では更にそれにつけ加えて、その茶碗には悪い菌がついているので、伝染されては困るとの理由からだと言う。[1] 韓国においても、それと類似した行為があり、床に供えていた一膳のお粥を出棺と同時に家の棟を南に向かって、投げたり、ま

中国や中華民国などには篩や枡を葬送行事中に用うる習俗がある。その中には、位牌や穀物、茶碗や箸が入れられていることがある。主なきあとの一家、一族の和合団結を願うためのものらしい。晴天の日でも傘をさすならわしがある。

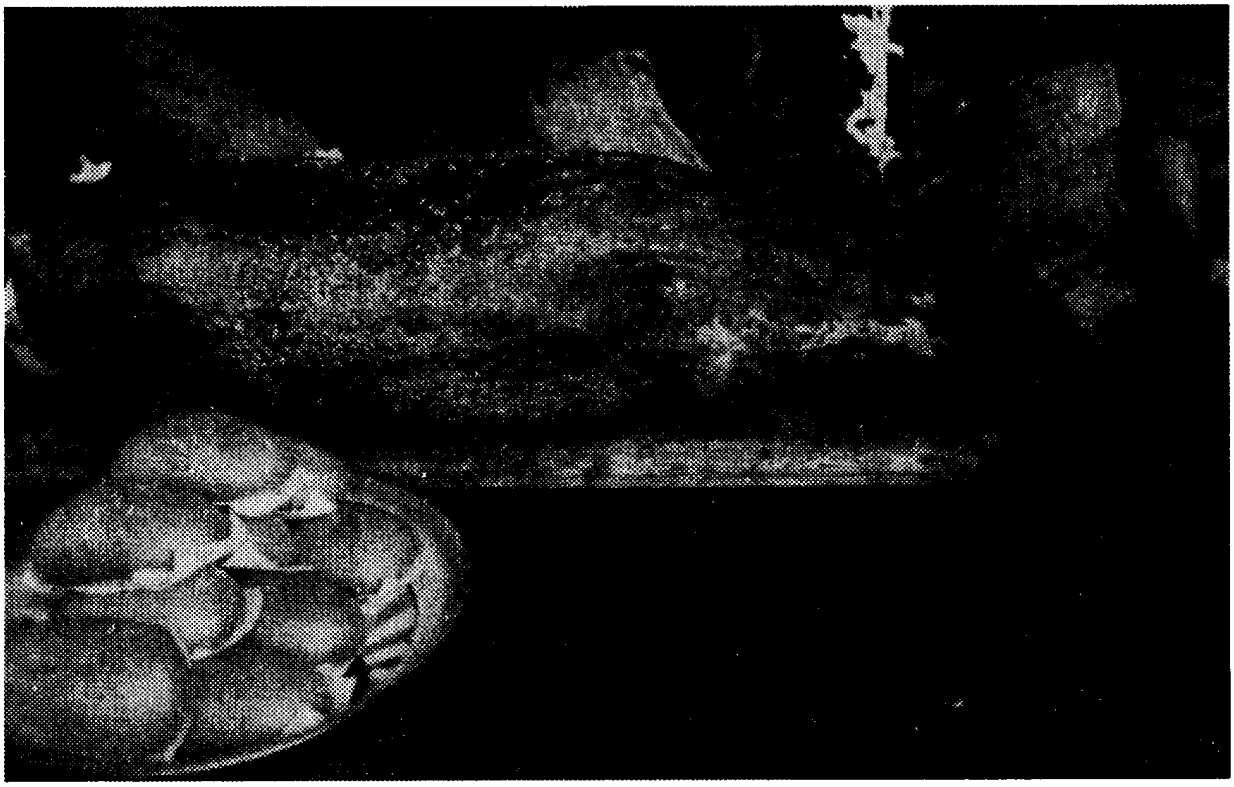
た、生前使用していた茶碗を投げ割る等死者（霊）の再来する事を極度に恐れる仕種をする。

④　脳溢血や心臓麻痺等の如く、急死した者は、一口も話をするひまもなく、死亡したため、さぞ、心残りが多いことであろう。死者は、家族をはじめ、色々の事が気になって、無事に成仏が出来ぬ。そこで周囲の人達は、このような事情を察して、「現在何か心配事はありませんか。」とか、「家庭の事等について、何か心残りの事はありませんか。」等問い正し、疑問の有無をカネを使用して占うのである。

⑤　台東では、葬式の時棺を置いたあとに古い「篩」を置く風習がある。その中には、茶碗や箸、その周囲には何本かのローソクを立てて点灯する。これは一種の和合を意味するものであり、主人があの世に行ったあと、お嫁さんも孫達も皆一致団結して、家の為に尽くしなさいと言う意を含んでいると言われる。また、葬式行事の中に、施餓鬼会的な作法があり、葬式中に金銭を撒いて、親戚や、その近隣の子ども達に拾わせる風習もある。日本にもそれとよく似た習俗が、ついに最近まで残されていたが、果して、これと同じ考えなのかは、ハッキリとしない。

⑥　中国南部（広東、福建、厦門）や台湾、東南アジアの華僑の間（私はシンガポールでかかる習俗を見た）において、葬式か又は、一周忌の法要等で見られる習俗であるが、丸い莫蓙を

囲んで、その底を見つめながら、道教僧（道士）や仏僧が呪文（経文）を唱える。これは、血を流して苦しんで死んだ亡者の場合に用いることになっている。たとえば、お産で死亡したとか、癌で苦しんで死んだ時等に、その人が無事に成仏しているかどうかを、銭二個を用いて占うのである。未だ成仏出来ずに、あの世で迷っている人達を、救うための行事である。「式が済み、あなたの埋葬をする時間が迫っております。これで告別式を終ろうと思いますが、宜しいでしょうか。」等と、死者に聞き正すのである。銭を撒き、銭の二個が二つとも表を向くか否かによって、吉凶を占うのである。結局は、銭紙をどんどんと燃やしながら、凶の場合、吉が出るまで続けるのである。凶が吉に転ずる事によって、死者が迷いを転じて成仏出来るものと信じているのである。「どうか、金紙、銭紙をどんどん焼きますから遣て下さい。」と祈りつゝ占うと、奇妙に吉運が良く現われると居合わせている信者達が、不思議がっていた。死亡した父親には、すでに生長したところの息子と、未だ幼い弟達がいる。親は幼い子どもを残して、死の国に旅立つ事は、非常に気が重いらしい。つまり幼児が不憫（憫）で死んでも死に切れぬと言う心境である。こんな場合に、いくらゼニ占いをしても凶ばかりで吉が出る時は、殆んど無いと言われる。このような時、大きな息子が、「お父さんの身代りになって幼い子どもを成人にな



マレイシア・ペナン地方における華僑部落の葬式、丸ごとあげた豚の姿が如何にも印象的だった。時に葬列の先端に所持せられる場合もあると言う。

るまで、私がきっと育てますから、ご安心して下さい。」と、金紙、銭紙を焼き乍ら誓い、占うと吉報が良く出てくるといわれる。

⑦　台東の葬儀場で見た、若いきれいなお嬢さんは、21歳で死亡し、昨日臨時に「結婚式」をあげた許りである。結婚式の前（死亡後三日目）親族立会のもとに簡単に行われたが、亡者を花嫁姿にして、彼女を何人かでうしろから支え、相手の男性と一緒に晴れの写真をとったのである。台東の葬儀屋さんは、私も長い間この仕事をしているが、このような事は初めてであると述べていた。彼女の死因は、青酸加里を服毒して、自殺を計ったのである。

⑧　台湾では、未だお嫁に行かない娘が死亡した場合、その兄や弟達は、姉や妹を祀らないところもある。これは昔の中国におけるしきたりを、その儘残しているものとも考えられる。古来中国では、女の子を男尊女卑の関係より、軽視したのである。台湾でも、一定の年齢になり、結婚をしていない娘の場合、無縁（位牌をつくらない）になることは、40歳以上の娘達なら皆知っている筈だという。実際にはむしろ当人よりも母親の方が心配する。ここに位牌結婚と言う習俗が生ずるわけである。数年前、台湾の新聞に掲載されて、話題になった事もある。位牌結婚、つまり、結婚をしなかった娘が死亡して、そのあとを見てもらう場合、位牌結婚といって、位牌に金銭をつけ、形の上で妻として迎えてもらう習俗である。そのようにせぬと女性の場合、無縁仏になってしまうからである。その人は位牌を寺院に持参して預ってもらうのである。それには、それぞれ位があって、五万円とか十万円、十五万円、二十万円とかを寺院に納めねばならぬのである。台東で聞いた話によると、その家や、寺院によって異なるが、五千円、壱万弐千円のところもあると言う。

位牌結婚をする相手は、既婚者でも出来るが、出来得れば、若手に委せ既婚者はしない方が良いとされている。位牌結婚をすると、一応正妻と言うことになり、次に結婚した相手は、後妻とみなされるからである。しかしそれはあくまでも、道義上、宗教上の問題であり、法律上の事では無いらしい。

紙袋の中に死んだ人の遺物を入れて、風呂敷に包み、道端に置く。そこを通りかゝった人が、それを拾うと、その人に嫁ぐ事になる。その風呂敷の中には、住所が書いてあるので、拾った人は、必ずその人に連絡をしなければならぬ事になっている。つまり、拾った人にその娘が嫁ぐ事になるのであり、その娘の家からは、何万かのおかねを添えて、拾ってくれた人に届けるのである。位牌をつくったとしても、結婚しないで、死亡した娘の位牌は、自分の家に置いてはいけないと言う風習があるので、それが問題の種となったのであろう。

二

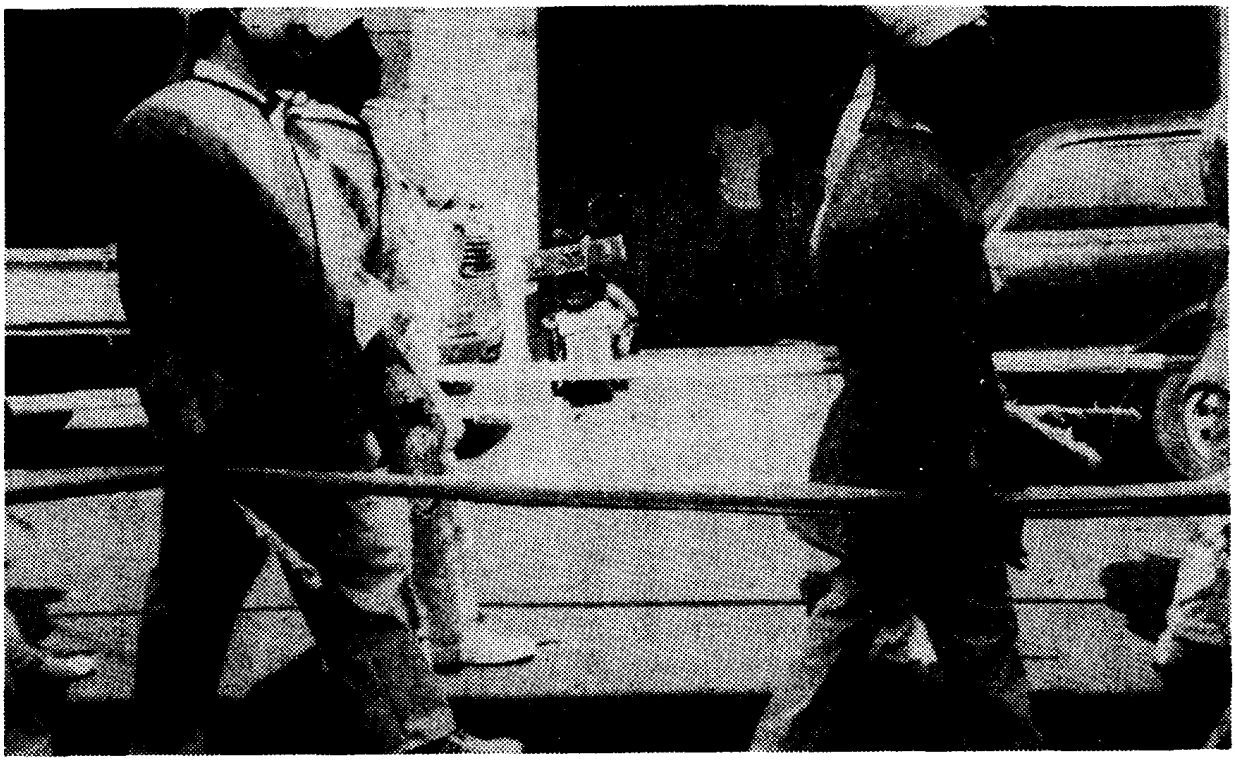
家庭内における葬送の行事が終了すると、いよいよ出棺、行列と言うことになる。昔は乗用車が無かったので、棺はすべて、人力によって墓地まで運ばれたのであった。「発引」と言って、小規模なものは二人より担がれ、普通は四名から八名によって運ばれるのが通例であった。盛大な葬式の場合、または、墓地が遠方の場合には、十六名を越え、二班に別れる場合もあった。発引の人は出来得れば、同性の親しい人が宜しいと考えられていた。

現在では、乗用車を利用するのが普通だが、それでも一定の部分だけでも、葬列を維持する場合が多い。または、霊柩車の速度を落して墓地まで葬列を保つ場合もある。交通事情の激しさにより、日本の場合と同様に、葬列を組んで歩く事は、だんだんと少なくなり、田舎部は別として、都会の場合は、殆んど行われなくなった。

しかし、葬列の考察の意義は、葬送の在り方、つまり、死者に対する霊の見方や考え方等に大いに関係するところがあるので、この問題について、論を進めて行く事にする。元来葬列の構成如何、その大小は死者の社会的地位。縁故者や兄弟子ども達の地位、兄弟数の如何等によって支配されるところであるが、小さな場合は、十名内外から大きなものになると、数千名に及ぶものまである。台湾の台南や、インドネシアのバリ島における盛大な葬式風景を筆者は見た事があるが、同じ場所で、数名からなる小さな葬式にも触れた事がある。葬列の内容は、それぞれの地方や、宗教別によって異なるが、本質的に似通っている面も見受けられる。

葬送行列の先端の習俗は、その地域の死霊観によって決定ずけられる場合が多い。日本[2]の場合は、一般に松明・高張提灯・花籠・大旒(だいりゅう)と先ず、松明が先頭に来るのが通例である。この松明が先にあるため、地方によっては、役名に変り墓地に先行して行く役を、先松明[3]、清めの火、道案内、魔払等と呼んでいる。昔は呼称の如く、松明的なものを用いていたのかも知れぬが、時代が過ぎるにつれて、提灯の如きものに変化して行ったようである。この根本的な考え方は、前述の役称に示されている如く、あくまで火的なものとして考えられたと思われるが、先頭を歩くと言うその目的は、道案内、葬送行事に参加しているのであるから、魔祓いのために、宗教的な感情からおして、暗黒の世界を照らすための灯と、遺族達の立場としては、極楽浄土への親心からと考えられる。

当然このような考え方は、我国のみではなく、他の国においても、それ、相当の考え方として存在する事は確かな事であった。つまり、葬送儀礼としての葬列と、火(松明的なもの)との関係は、古代中国をはじめとして、ローマやギリシャの



中華民国台南地方における葬列のひとこま。男女の近親者は赤い提灯を、男の人のみ紙華を持っている。霊柩車につながれた白い布を握りながら歩いている。

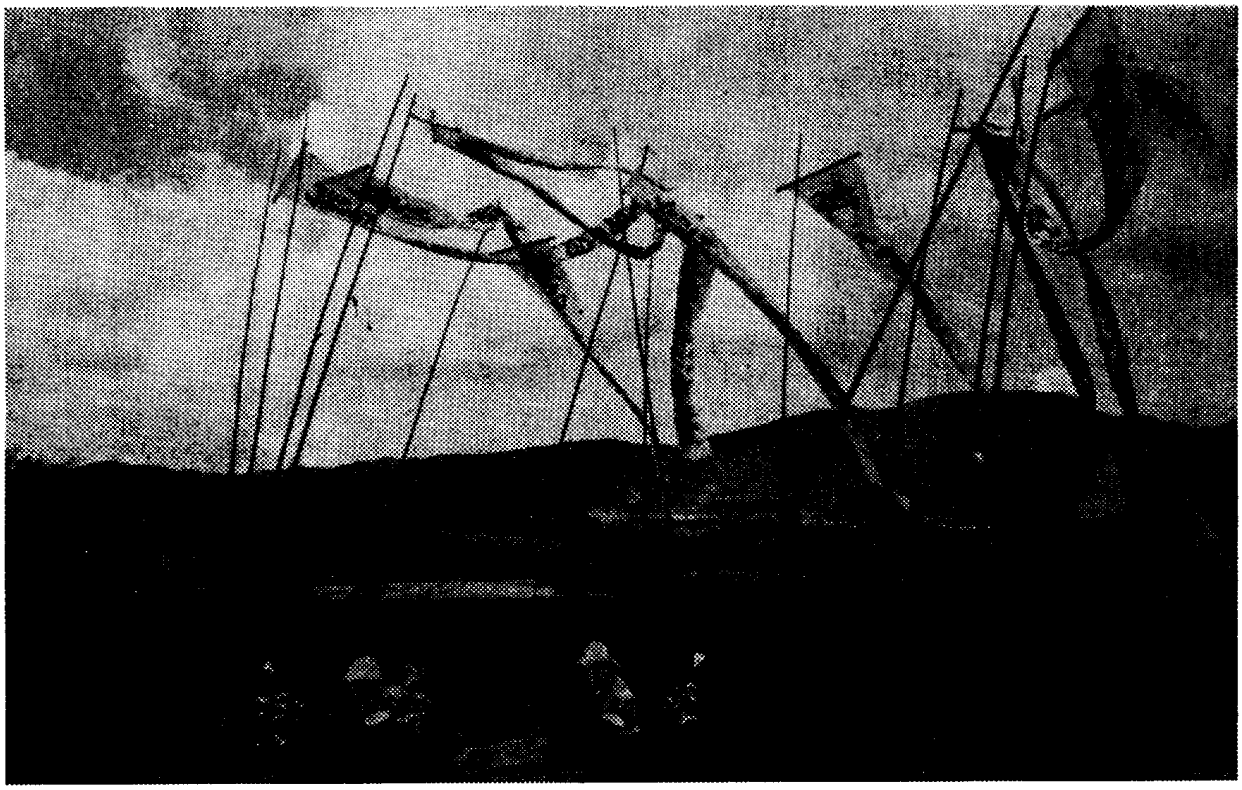
当時に於いても行われていたと言われる。死者を恙無く、あの世に送り届けると言う本意は、必ずしも、火（あかり）を先頭に位置させるだけとは限らない。

かつての中国[4]では、旗・燈籠・香亭・奏楽者・啼き男・紙銭撒き等、赤い旗を先頭に、赤の秘める魔力のもとに、悪霊を退散させると言う方法も考えられたようである。――赤色は火と同様に考えられていたからである。

朝鮮[5]においても、葬列は炬松（松明）または、方相を先頭に霊車・銘旗・燈籠の順に行進した事が示されている。方相は、中国等で言う開路神的なもので悪魔を払う故、人の冥土への無事を助ける神様である。

台湾においての習俗は、かつての中国南部地方のしきたりが残されているようであるが、地域と時代性によって、その趣が多少異なっている。典型的[6]な盛大な葬列の場合ではあるが、その先頭部は、第一に猪羊、次いで、開路神・放銀紙・草龍・銘旗・孝燈・大鼓吹の順であった。猪羊とは、一疋のまゝの豚と羊を丸煮にしたもので、台上に載せて葬式の先頭を二人で担いだのである。その意はおそらく路上の有縁、無縁の者に対して、安全を計るためのものであったと考えられる。

マレイシアのペナンの華僑の葬式においても、今なお、このような習俗の存在した事を見かけられた。ついで、開路神



沖縄県石垣島地方にて、埋葬後の風景、葬列に参加した弔旗が、埋葬地にたなびいている。

（現在は見かけられない）の出現であるが、死者が無事、あの世へ行くために、お出ましするところの神、つまり、悪魔を追い払うところの神である。紙で作られた約一丈の高さのある人形であり、腹中には豚の臓物を入れて置くと言われる。これらは皆死者を守るための習俗の一つであるが、更に放銀紙的とて、銀紙を沿道に撒き乍ら進む。台湾北部の潮州地域では、赤花を撒き乍ら歩いていたが、もともとは冥土に行く道を買い、死者の安全を計る意であると考えられる。橋を渡る場合等には、小さな紅布を置くとも言われるが、前者の場合と同意にとられるものであろう。

葬列時に紙銭[7]を路上に撒くと言う風習は、中国東北部（旧満州地区）をはじめとして、各地で聞かれるところであるが、それは、霊魂の通過する路を買うためのものであり、買路銭[8]の名で呼ばれている。日本においても、これと同様、葬列中銅銭を路上に撒き子どもや貧しい人達が、これを拾った例もある。かかる習俗は、各地に存在したのである。

更に、霊の進むべき先道を浄めた上、「草龍」と言って、藁を堅く縛った一把の松明に点火して、死者のあの世への通行を便ならしむるための行事も行われた。

ビルマ[9]での葬送の場合も、あらかじめ施物が用意され、葬列の先頭にて、貧しき人達の間に物が配られ、死者の通過する道路を安全かつ無事に拓くと共に、開路銭的な役割を果す

べく、今尚、この習俗が残されている。

以上の如く、葬送習俗の中には、死者をあの世に安らかに送るべき意を持った習俗が非常に多く残されているのが常であり、その方法も、1　葬列の先端部に松明や提灯を掲げて、死者のあの世への歩行を便ならしめたり、（時に、赤い長旗を火にあやかって、先頭に掲げる事もある）2　葬列の先端部に、開路神や方相の如きものを構えて、冥路の悪魔を退散させ冥土への無事を計ったり、3　放銀紙・放施物とて、行列の先難にて銀紙または紙銭を撒いたり、物を施したりして、有縁・無縁の悪魔、または道路を占拠する魔霊等に対して、道を買い、霊を鎮め、祓い清める。4　楽隊を設け、音楽的効力によって悪霊を退散させる。5　葬列の先頭にて花火（爆竹）を上げる等の手段が取られている。デ・ホロートも中国宗教制度中において、[10]『行列の先頭の人達が、障害物にさしかかると、道を開けさせるために施物を施し、その後より「放紙の人」とて、通行に邪魔すると思われる邪悪霊に対して銀紙を撒き、その効力によって、周囲の一切の諸霊を鎮め退散させた例を述べている。つまり、通行の妨げになるもの、例えば商品を並べた床几または台・街路で人々に暖い食物を売る露店料理人の焜炉（こんろ）・休息中か食事中の苦力が一時置いた荷物・またはこの種の障害物に出会うと、道を開けてくれと要求し、これと同時に、直ぐ後から随行している苦力の手から、一、二枚のシーリスの葉に包んだ檳榔（びんろう）樹の実とシナノキの実の一片を、その人に提供するのである。この時の苦力は喪服を着ず、分配するこれ等の品を容れた籠を持って歩く。華南では、檳榔樹とシナノキとを刺戟剤として嚙（か）むことは、昔は盛んであったらしいが、現在ではこの慣習が殆んど止んで、煙草等に置き換えられたらしい。然し乍ら互いに相争っている人が、謝罪して仲直りせんと思う時は、これらの品の若干を、休戦の旗のように相手の家に贈る事は、恐らく往古の名残りとして、今日なお行われる慣習であるが、このようにして和解の手を差し伸べられた相手方が、これらのものを拒むとしたならば、甚だ無礼と考えられよう。檳榔樹とシナノキが葬儀に際し分配される理由も、これで十分説明がつこう。実際、道を開ける役にある人は、彼がどいて貰う人に対し済まぬ事をしたと思う。それ故に直ちに謝るのである。多くの場合に、道を開く役は苦力だけに任され、簡単な葬儀では全く省略される。

次に所謂「放紙之人」、即ち「紙を撒く人」が現れる。これは遠縁の者・友人・又は知人で、同じく白い服と帽子を着し、時には粗麻布を着用している。彼の仕事は直径八乃至十糎の円形又は八角形の銀紙を街路に撒く事であり、もし行列が橋又は舟によりてクリーク或は河を渡る時には、水の中にも撒く。かかる紙片の多数を、金属貨幣を紐に通すように、

小さい棒に通して、わざわざ手に持って歩く。この紙銭は、俗間伝うる所によると、各所に徘徊して、街路や往来、山々や森林河川やクリークを毒し、あらゆる害悪を人間の上に起させる所の、邪悪なる霊に与えられる事になっている。かかる霊の多数は、孝心深い子孫にかまって貰えないため飢えて悲惨な有様にあり、棺の通る道路に主として群がり、生存者が葬式に際し死者に惜しみなく与えたる金銭を、嘆願文は暴力で奪おうとするとして、これらの霊の注意を外らすため、紙を撒くと言う方法が思いつかれたのである。餌食を襲う飢えたる狼の如く霊が金に飛び付いて、かくて棺も死者の霊も忘れて了い、行列を事なく通過させよう。紙が金貨に見えるように、銀紙は黄色に染められる場合も多い。裕福な家庭の多くは、上質の白紙の方形の紙片を用いる事を好むが、これは所謂「白銭」とて、銀紙よりも値が高く、従って目に見えぬ霊が一層に珍重するのである。銀紙も白銭もくるめて「買路銭」といわれるが、「通行を買い取る紙の金」の義である。

紙銭をかくの如くふんだんに贈る事によって、目に見えぬ霊が大いに宥められるとは言え、彼等を葬列から敬して遠ざけるには、これが決定的の方策なりとは決して言えない。銅製の喇叭で、細い管が滑り、口が曲っているもの二個が、紙銭を分配しても効果のない霊どもを、追い払うために用いられる。「号頭」乃至「号首」と呼ばれるこれらの楽器は、二、三音を出すに過ぎないから、適当なる楽器ではない。放紙之人の後に続いて喇叭を持って歩く者は、時々喇叭を吹いて単調な間の伸びた音を出すに過ぎない。以上の人物は黒麻の上衣を着いているが、この上衣は胸の真中で縛りつけられ、それぞれの口に沿うて赤い色の幅の広い縁がとられ、おまけに胸の真中と背には、「号首」と書いた白い布片がついている。

旗の長い側面が竿に縛りつけてある。このような縛は、概して列中に数本ある。その多くは赤であるが、赤は魔物の力を追い払うからであろう。

以上の如き巧妙な計画の結果、霊も遺骸も途中においては、目に見えぬ悪魔の襲来から、相当確実に護られている。然し福建省内のある地方では、悪霊を追い払う有効な手段を、いま一つ附加する事が望ましいと見ている家庭が多くある。即ち行列の先頭で時々花火を上げるのである。厦門市の所在する府の首都たる泉州府に、この慣習が特に行われている。』と述べられている。葬送行列の中で、ひときわ目立ったものに銘旗がある。銘旗は故人の官位姓名を書いた白旗であるが、礼記の中に「銘、明旌也。以死者為不可別己。故以其旌識之」とあるから、かなり古い時代のものである。銘旌は霊旗的なものであるが、心の中に深く銘じ得るもの、忘れる事の出来ぬ感銘深きものとして、かような名称が付けられたものである。娘婿や孫婿より死者に贈られるところの銘旌も

中華民国台中においての葬列風景楽隊に続いて踊り子たちも舞いながらそのあとを追う。

あり、この場合前者は紅色、後者の場合は黄色のものもある。

葬列の中を銘旗、吉燈（白い提灯に吉句を書いたもの）五彩旗（赤・薄黄・白・黄・薄茶（麻）の五色からなる旗）・鼓吹（楽団）・凉傘（台傘）・花車（花で飾られた車）・花輪・像亭（死者の写真を載せた台）・歌謡音楽団（歌をうたう人達）・魂轎（ミタマカゴ）（五穀豊穣を祈るために中へ五升桝と五穀の種を）男性が生まれ代って来るように鉄釘を（中国では男尊女卑の国なので、男子が生まれるように鉄釘、つまり、丁は男に通ずる）財宝を得るよう入れるのである。金童玉女（死者に従って天に昇ると言う男女の天子）僧侶・紙旗（紙で作られた吹き流しの旗）・霊柩（霊棺）棺の前後には綱、または白布が結ばれ、夫々手を触れ乍ら、歩行する。この綱は棺を引くと言うよりも、泣き乍ら歩くので、ころばぬように、歩調が遅くならぬようにあるのだと言われている。

遺族のうち、男は喪服を着用し、草鞋を履く、女は喪服を着用し、靴に喪布を付したものを履き、号泣し乍ら棺の後を歩く。続いて一般会葬者の順である。大きな葬送の場合には葬列の中に、何本かの旗・花車・楽団等が入り賑かさを増す。高雄地方で見かけた葬列の場合は、最初に米を入れる升のような物の中に、色々な物を入れ、その上に割に長目の白い旗を長男が持って歩く。提灯がその後に従う。人形も参加する。出来の悪い紙張りの人形であった。

葬列が村をはずれ、または一定の場所まで来た時、喪主

中華民国台北郊外での葬列、銘旗は主要な部分を占め、主に息子が持つ。

（息子）は棺を止め、引返して、先ず権力の強い外戚の者達に対して帽子を取り跪いて、「今日はお見送り有難うございました。ここまでで結構です。これ以上御迷惑おかけする事は出来ません。どうぞお引取り下さい。」と厚く礼を述べ、同時に一般の会葬者に対しても辞退をする事になっている。一般の人達は、これにて引揚げ、遺族や故人の友人達は更に墓地まで送る事になる。

台湾や中国等の国々においては、葬列の途中、小休止して弔問者をもてなす習俗がある。台湾の高雄[11]近在の広東部落の葬送にて、この風俗を見かけたが、「排路祭」と言って、生前恩を受けた者達が、徳を慕って集まり、葬列の通る傍らに、テーブルを置き豚肉や菓子果実等を供え、香、ローソク、銀紙を焼いて位牌に対し供養礼拝するのである。

中国東北部[12]においても、行列の途中で紙銭を撒き、友人や知人達は葬列の道路わきに、路祭棚（ルーチポン）と称するむしろ小屋をつくり、テーブル・椅子を置いて茶菓をもてなし、路祭を行った。また、北京近在[13]においても、かつて同様な習俗があり、町で生前お得意先になっていた店や友人の経営している店の前に、テーブルが用意され、葬列がその前を通ると臨時に止まり、茶菓の接待を受けたと言う。その仕草内容については、多少の相違はあるかも知れぬが、死者に対して供養をすると言う点については変りない。台湾の高雄の場合は、もて

中華民国潮州広東部落にて排路祭、つまり、生前恩を受けた人々や特に親しい人達が徳を慕って集まり、葬列の通る辻などに卓を設け、香・ローソク、山海の珍味を供え、銀紙を焼いて故人に対して供養礼拝する。喪主は、もてなしに対して土下座して頭を垂れ答礼するのが儀礼とされている。

なしに対して喪主は土下座して頭を垂れ、答礼をしていたが、旧来の風習が強く維持されていたのであろう。

葬列が墓地に到着すると、いよいよ埋葬する事になる。これを台湾や中国では「落葬」と呼んでいる。埋葬の場所や、日時については、地理師によって、あらかじめ選定してもらうのが通例であり、現在でも固いところでは、昔日の如く地理師によって行われているところもある。従来は死亡後七日間ぐらい、しかも奇数の日が一番適当の日と考えられていたが、現在は、色々な配慮から短縮されつつある。

地理師（日師）は故人やその家族の運命を支配する力を有しているので、ある意味では非常に大きな力を持ち、尊敬され、時には僧侶以上の場合もある。（世襲をとるものが多い。）埋葬の儀式は葬送行事の中で、大きな役割を持っているので、地理師の力を借りる場合が多いわけである。納棺や埋葬をする際、故人の年齢や生年月日、死亡時の歳廻り等によって、たとえ兄弟親族なりとも、そこに参加出来ぬ場合もある。近年は多少このような仕来たりも略され、その場に居合わせても、その時だけ目をそらせるとか、後を向いて、その場を直接見なければ良いと言って、葬送に関する諸習俗も、だんだんと軽くなって来ている。埋葬のための穴掘りは、台湾や中国の場合、昔日においては、「土公」と呼ばれる賤民によってなされたが、現在においては近隣の人達によって行

中華民国潮州地方における埋葬の風景地理師の指示に従って竹に赤色の印をつけ両側にヒモを結んで棺を設置する方角を決める。羅針盤を用いて正確な角度に棺が置かれるまでは何回も修正される。正しい方向に棺が置かれない場合は、死者がうかばれぬばかりでなく、子孫にも良い結果が訪ずれぬと言われる。（広東部落にて）

われている。埋ける方位も台湾では地理師の指示、または古来よりの習慣によって行われている。埋葬方法は、先に喪主が鍬を取り、続いて家族、親戚、最後は土公によって始末せられる。その間、周囲の号泣なお止まずと言ったところである。台中や台南等の墓地を訪ずれると、新しく埋葬された墓土に、二本の竹に紐が張られ、赤色のしるしをしたものを、良く見かけられるが、これらは、埋葬の方角を地理師等によって指示されて建てられたところの遺構である。

――地理師は現代でも台湾等に存在している。地理師のための学校の有無や修行等についてはわからないが、世襲・独学と言うところであろう。社会的地位は必ずしも高いとは限らず、普通の家庭に住み、報酬については、その家の地位によってお礼を出す。定める根拠は、霊感によるものでは無く、俗に言う知的なもの、子孫の生年月日、本人の生年月日、当日の月日、時間等から割出し、それを参考としてみる。一般の人々の中には、それを信じようとする人が多い。――

――従来、台湾や中国等では、日本の如き先祖代々と言う家族本位の墓は持たなかった。人が死亡し、墓に埋葬する場合は、地理師等に見て貰い、それによって、月日や方位等を決めて埋葬するため、家族の一人一人が皆異った所に埋けられたのである。いわば個人単位の墓を言うことになる。最近では、経費の節約上、または、先祖を祀るのに便利と言う意味

で家族の墓地を一ヶ所に集め供養をする日本的な、いわば先祖代々の墓が増えて行く傾向にある。――

――埋葬をする場合、先ず始めに土をかけるのは喪主（男子）である。特に中国や台湾、東南アジアの華僑圏にかけては男尊女卑の考え方が強固のためかその傾向が一層強い、続いて親族、友人などの順である。穴掘の作業と最後のあと始末も身分[14]の低い人達の手によってゆだねられる場合が多かった。埋葬の方法も単純にそのまま埋けられる場合もあれば、なにか呪文を唱えながら埋ける場合、ぐるぐると穴の周囲を廻りながら埋ける場合など、その宗教や地域の土地柄によってまちまちである。また、穴掘役に対する考え方の主要をなしているものは死霊を対象にしているものだけに、葬送行事の諸役中一番嫌われる仕事のうちの一つであった。それ故賤民に委されるのは当然なる事と考えられていたのである。――

――埋葬（主として土葬の場合）をしてから後になって遺族たちの間に気にかかる事がある。それは、1　死亡してからの蘇生の問題と、2　埋けられた屍体が動物などに荒される事がないかと言う事である。前者は棺に孔をあけ、内部と外部との通風をよくして、万に一つの蘇生を考えての親心よりの発想であり、この場合は更に地上とも竹などの如き管状の棒を挿備えることもあった。わが国の葬送習俗に残る竜頭（たつがしら）の竹柄や旗竿の竹を埋葬時に墓地上に挿すが如き風習もこれに類したものと考えられる。後者[15]の場合は墓地の周囲に細かい砂を撒いたり、灰を撒くなりして、墓地に狐や狼、狸などの動物が近づいて荒し廻ったか否かを警戒することである。（これらの動物が屍体を掘り返して死者に傷をつけると言うだけではなく、死して霊なき屍体に動物霊が入り込み、再度生まれ代る事の出来ぬ立場を恐れたのであろう。）これを韓国では灰隔（はいかく）と言い同時にこれによって墓部の湿気や腐敗を防ぐ事にも意を注がれたのであった。日本の最南端与那国島[16]においても死亡後一週間にわたり朝夕の二回墓参を行うが、墓参する人たちは墓地に着くと先ず第一に墓前に撒いてある白砂の上に目を向けたと言う。

白砂の上に亡霊の足跡、または鳥の足跡があると信じているからである。石垣島でも死亡後七日位たった日、周囲に白砂（粉）のようなものを撒いて死者の足跡や獣の足跡が有るか無いか気を配る家庭もあった。何れにしても死霊の恐怖面と保護的な面に非常に気を遣った事は確なことである。

参考・引用文献

（1）韓東亀「韓国の冠婚葬祭」昭和四十八年三月図書刊行会発行　三〇六頁

（2）和田謙寿「仏教の地域発展」昭和五十三年三月仏教民俗研究会発行　三一四頁

（3）井之口章次「日本の葬式」一九六五年早川書房発行　九三

頁

(4) 重田勘次郎「世田風俗志」明治三十七年二月博文館発行
一四八頁

(5) 重田勘次郎「世界風俗志」右　同　八二頁

(6) 鈴木清一郎「台湾の冠婚葬祭」昭和九年台湾日日新報社
二四一頁

(7) 関　真「満州の風俗誌」昭和十年九月満州事情案内所　一
一一頁

(8) 内田道夫「北京風俗図譜(I)」昭和三十九年七月平凡社発
行　九六頁
井出季和太「支那の奇習と異聞」昭和十年五月平野書房発
行　七五頁

(9) 国本・今永訳「ビルマ民族誌」昭和十八年八月三省堂発行
六八五頁

(10) デ・ホロート(清水・荻野目訳「中国宗教制度」昭和二十
一年八月大雅堂発行　一三九頁、一四〇頁

(11) 銘木清一郎「台湾の冠婚葬祭」右　同　二四七頁

(12) 関　真「満州の風俗誌」昭和十年九月満州事情案内所　一
一一頁

(13) 内田道夫「北京風俗図譜(I)」昭和三十九年七月平凡社発
行　九十九頁

(14) 国本・今永訳「ビルマ民族誌」昭和十八年八月三省堂発行
六八七頁

(15) 韓東亀「韓国の冠婚葬祭」昭和四十八年三月国書刊行会発
行　三〇七頁

(16) 池間栄三「与那国の歴史」一九七二年大晃印刷　三一頁